

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

令和 2 年 3 月 1 7 日

農林水産省

北海道（前回変動:平成30年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は550kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、品種構成に大きな変化はみられない。（表1）
なお、直播栽培に適した新品種「えみまる」の増加が見込まれる。

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
ななつぼし	585	44.0	45.9	45.0	44.1	44.1
きらら397	602	13.6	9.8	9.2	9.2	9.3
ゆめぴりか	564	17.4	19.3	20.1	21.3	21.3
そらゆき	629	0.2	0.4	0.5	0.4	0.3
えみまる	586					0.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

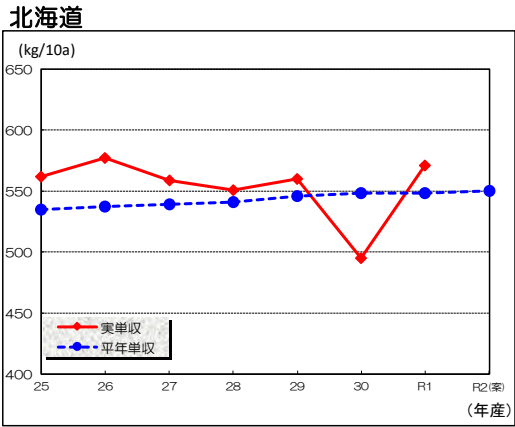
主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
石狩	549	6.9	6.8	6.9	7.0	6.9
南空知	557	19.1	18.3	18.1	17.9	18.5
北空知	581	25.4	25.5	25.6	25.7	25.6
上川	585	28.1	28.7	28.6	28.2	28.1
留萌	535	4.1	4.1	4.1	4.1	4.0
渡島	503	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8
檜山	520	3.7	3.8	3.8	3.9	3.8
後志	540	4.3	4.3	4.3	4.5	4.7
胆振	514	3.3	3.4	3.5	3.6	3.5
日高	507	1.3	1.3	1.3	1.3	1.2
オホーツク・十勝	529	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

北海道における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が1.5ポイント減少しているものの、千もみ当たり収量が2.4ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は2.3ポイント増加している。
（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



北海道	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	562	577	559	551	560	495	571	
7中5平均				561 (13)				
平年単収	535	537	539	541	546	548	548	550
前年差	0	2	2	2	5	2	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	22.5	22.1	22.2	22.0	22.2	21.9	△ 0.3	22.2	98.7	△ 1.3
1㎡当たり有効穂数（本）	563.1	559	563	538	500	599	99.0	558	99.1	△ 0.9
1穂当たりもみ数（粒）	61.5	59.7	60.2	63.2	61.6	58.1	△ 3.5	60.5	98.4	△ 1.6
1㎡当たり全もみ数（百粒）	346	334	339	340	308	348	40.0	341	98.5	△ 1.5
千もみ当たり収量（g）	16.5	17.3	16.8	17.1	16.7	16.9	0.2	16.9	102.4	2.4
玄米千粒重（g）	21.7	21.7	21.6	22.1	21.6	21.2	△ 0.4	21.8	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	566	578	568	580	513	588	75.0	579	102.3	2.3
前40日平均気温（℃）	0.5	0.1	0.3	1.5	0.7	0.7	△ 0.0	0.9		0.4
後40日平均気温（℃）	0.8	△ 0.2	1.7	△ 0.9	△ 0.8	0.5	1.3	0.6		△ 0.2

資料：作物統計、アメダスデータ（気象庁）
注：1 アメダスデータ（平均気温、日降水量）は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均（対前年差）。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値（5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値）である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移

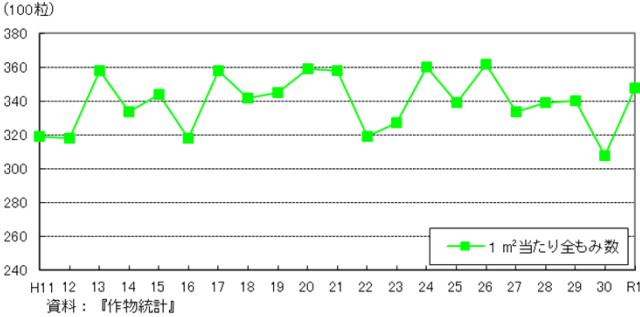


図3 千もみ当たり収量の推移

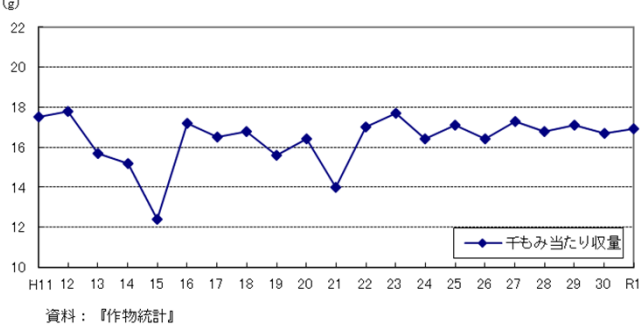


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
25	×	◎	105
26	○	—	107
27	×	◎	104
28	—	○	102
29	—	○	103
30	※	—	90
R1	○	—	104

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（北海道は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

（参考）栽培技術等の動向

収量・品質の安定に向け、健苗の育成や稲体の耐冷素質の向上を図るため、以下の指導が行われている。

- ・ 育苗管理の徹底
- ・ 深水管理とそれを可能とする畦畔整備
- ・ 地力増進やほ場の透水性改善
- ・ 防風対策等の栽培環境整備
- ・ 適正施肥

また、成苗移植の普及など安定生産に向けた栽培技術が定着している。

青 森（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は597kg（対前年差+5kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「まっしぐら」が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「まっしぐら」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。県内の「つがるロマン」の約3割を作付けしてあるJAでは、令和2年産から「つがるロマン」の割合を7割から3割に縮小するなど「まっしぐら」への切り替えの動きが見られる。（表1）

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
つがるロマン	592	32.4	29.5	27.6	26.6	25.2
まっしぐら	617	62.3	63.4	64.1	64.9	67.5
青天の霹靂	539	1.3	3.7	4.4	4.6	3.5

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
青森	593	11.0	11.2	11.3	11.5	11.6
津軽	631	61.8	62.2	61.8	61.5	61.2
南部・下北	567	27.2	26.6	26.9	27.0	27.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

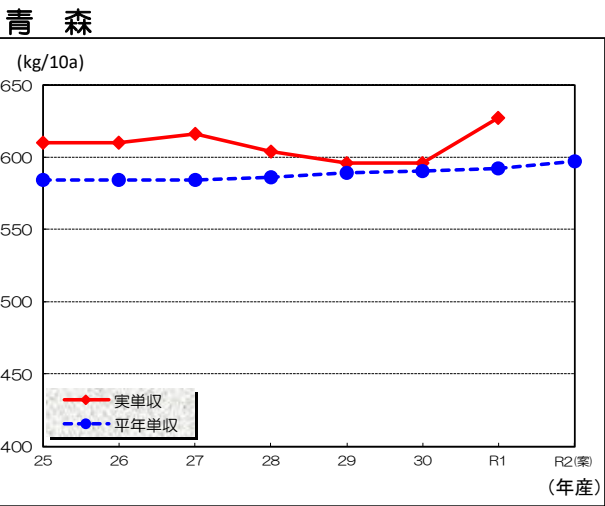
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

青森県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が1.3ポイント、千もみ当たり収量が0.5ポイント増加し、10a当たり玄米重は2.3ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



青 森	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	610	610	616	604	596	596	627	
7中5平均	607 (15)							
平年単収	584	584	584	586	589	590	592	597
前年差	2	0	0	2	3	1	2	5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	21.0	19.6	19.5	19.5	19.4	19.6	0.2	19.9	94.8	△ 5.2
1㎡当たり有効穂数（本）	416.2	452	427	421	405	455	50.0	428	102.9	2.9
1穂当たりもみ数（粒）	80.1	74.1	77.3	83.8	84.9	77.4	△ 7.5	80.1	100.0	0.0
1㎡当たり全もみ数（百粒）	334	335	330	353	344	352	8.0	339	101.3	1.3
千もみ当たり収量（g）	18.3	18.7	18.6	17.3	17.7	18.4	0.7	18.4	100.5	0.5
玄米千粒重（g）	22.0	22.7	22.0	22.6	22.0	22.2	0.2	22.2	100.9	0.9
10a当たり玄米重（kg）	605	627	615	610	609	646	37.0	619	102.3	2.3
前40日平均気温（℃）	0.3	0.9	0.1	1.7	1.5	0.8	△ 0.8	0.9		0.6
後40日平均気温（℃）	0.9	△ 0.4	0.9	△ 1.6	△ 0.6	1.0	1.7	0.7		△ 0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

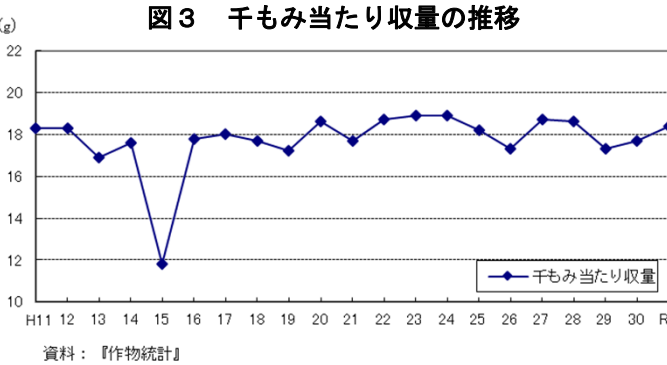
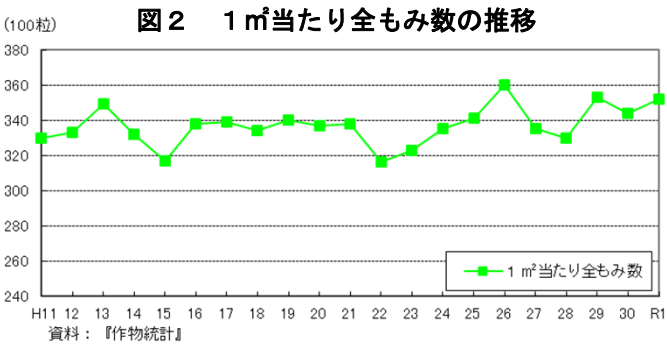


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終 指 数）
25	○	—	104
26	◎	×	104
27	—	○	105
28	—	○	104
29	◎	×	101
30	○	×	101
R1	○	○	106

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（青森は1.85mm）以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産（気象に左右されない米づくり）に向け、以下の指導が行われている。

- 適正な肥培管理（つがるロマンは多肥料栽培に弱いことから追肥は窒素成分で2kg以内にする等）、水管理、適期移植、土作りの推進等（安定栽培技術の普及・定着）。
- 育苗箱全量施肥では、施肥後30日程度の肥効抑制期間で分げつが抑制され、慣行栽培に比べ穂数の減少傾向が強いことから、穂数確保のため即効性肥料も併せて施用する方法が県内で一定の広がりを見せている。

岩 手（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は539kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「銀河のしずく」が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「銀河のしずく」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
ひとめぼれ	555	68.4	70.5	70.0	69.1	68.9
あきたこまち	560	16.7	15.1	14.7	14.4	14.7
いわてっこ	541	5.4	4.4	4.4	4.5	4.8
銀河のしずく	577		0.3	1.7	2.8	3.0
						+0.9/年

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
北上川上流	572	23.6	23.7	24.0	24.5	24.8
北上川下流	544	69.4	69.3	68.9	68.5	68.3
東部	490	2.7	2.7	2.7	2.5	2.5
北部	512	4.3	4.3	4.4	4.5	4.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

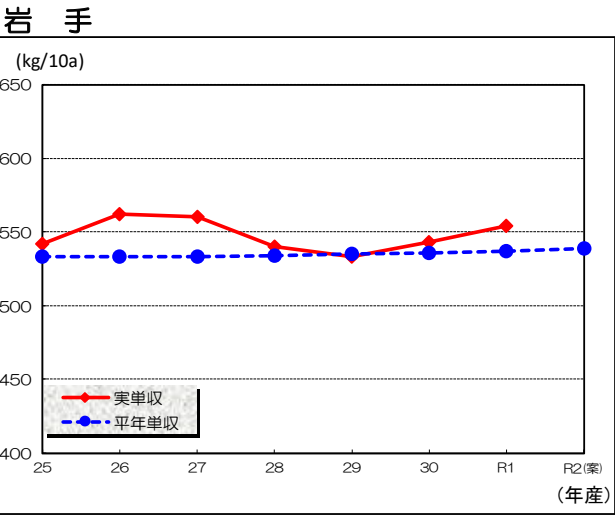
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

岩手県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.7ポイント、千もみ当たり収量が0.5ポイント増加し、10 a 当たり玄米重は1.6ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



岩 手	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	542	562	560	540	533	543	554	
7中5平均	548 (11)							
平年単収	533	533	533	534	535	536	537	539
前年差	0	0	0	1	1	1	1	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.7	17.6	17.6	17.5	17.3	17.4	0.1	17.9	95.7	△ 4.3
1㎡当たり有効穂数（本）	431	468	426	440	412	457	45.0	439	101.8	1.8
1穂当たりもみ数（粒）	66.9	62.0	66.0	66.1	69.2	65.2	△ 4.0	67.1	100.3	0.3
1㎡当たり全もみ数（百粒）	288	290	281	291	285	298	13.0	290	100.7	0.7
千もみ当たり収量（g）	19.2	19.7	19.6	18.7	19.4	19.0	△ 0.4	19.3	100.5	0.5
玄米千粒重（g）	21.7	22.4	21.8	21.9	21.9	21.5	△ 0.4	21.8	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	554	572	550	543	552	565	13.0	562	101.6	1.6
前40日平均気温（℃）	0.7	1.4	0.4	1.7	2.6	0.8	△ 1.9	1.2		0.5
後40日平均気温（℃）	1.0	△ 0.3	1.3	△ 1.2	△ 0.3	1.5	1.9	0.8		△ 0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

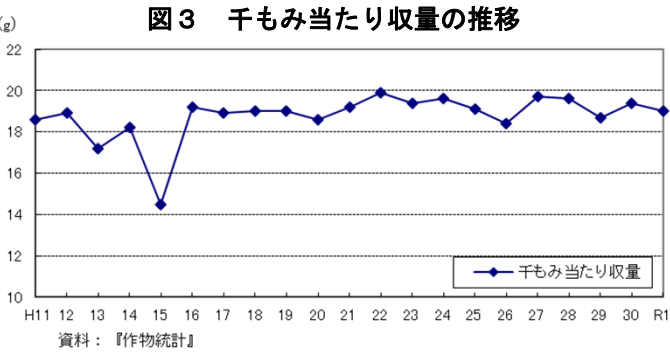
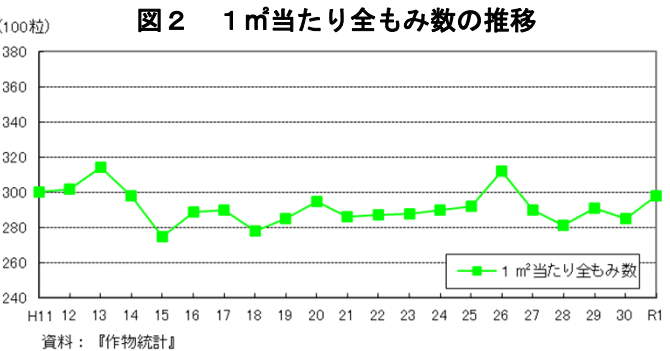


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
25	○	—	102
26	◎	×	105
27	—	○	105
28	×	○	102
29	○	×	98
30	—	—	101
R1	○	—	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（岩手は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- 品種特性を踏まえた品種の作付、低温障害回避のため適期移植の指導。
- 有機物による土作り、追肥の適正実施の指導（土壌診断に基づく補給型施肥（収穫等によってほ場外に持ち出される分だけを補給）及び追肥時期・追肥量の適正な実施（ひとめぼれ、あきたこまち、いわてっこ、銀河のしずくは幼穂形成期に2kg/10aを上限、どんぴしゃりは幼穂形成期に2kg/10aを基本）等を推進）。

宮 城（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は540kg（対前年差+4kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「つや姫」及び「萌えみのり」が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
ひとめぼれ	560	77.4	75.7	75.5	74.9	73.7
ササニシキ	570	6.3	6.2	6.5	6.2	5.8
まなむすめ	608	6.2	5.6	4.8	4.8	4.1
つや姫	588	4.7	5.6	6.5	6.9	7.1
萌えみのり	660	0.5	0.5	0.6	1.0	1.5
						+0.8/年

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「つや姫」及び「萌えみのり」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。
(表1)

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。(表2)

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

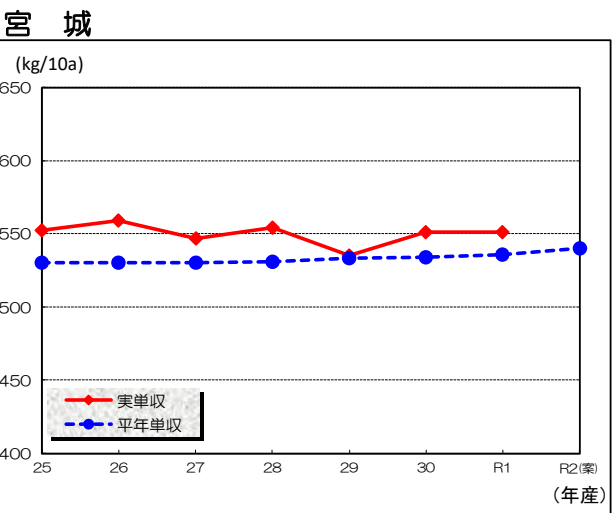
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
南部	529	10.6	10.5	10.3	10.1	10.0
中部	537	17.7	18.4	18.3	18.6	18.7
北部	559	60.0	59.1	59.3	59.3	59.3
東部	553	11.7	12.0	12.0	12.0	12.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

宮城県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。(図1)
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.1ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が4.0ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は2.8ポイント増加している。
(次ページ表3、表4、図2及び図3)

図 1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



宮 城	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	552	559	547	554	535	551	551	
7中5平均	551 (15)							
平年単収	530	530	530	531	533	534	536	540
前年差	0	0	0	1	2	1	2	4

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.2	17.4	17.2	17.1	16.9	16.8	△ 0.1	17.5	96.2	△ 3.8
1㎡当たり有効穂数（本）	437.8	463	439	460	443	464	21.0	444	101.4	1.4
1穂当たりもみ数（粒）	65.8	65.0	67.9	66.1	67.5	65.5	△ 2.0	67.4	102.4	2.4
1㎡当たり全もみ数（百粒）	287	301	298	304	299	304	5.0	299	104.0	4.0
千もみ当たり収量（g）	19.0	18.6	19.0	18.0	18.8	18.5	△ 0.3	18.8	98.9	△ 1.1
玄米千粒重（g）	21.6	21.8	21.5	21.8	21.6	21.2	△ 0.4	21.6	100.0	0.0
10a当たり玄米重（kg）	547	559	566	546	562	563	1.0	563	102.8	2.8
前40日平均気温（℃）	0.7	1.6	0.6	2.2	3.1	0.2	△ 2.9	1.2		0.5
後40日平均気温（℃）	0.9	0.1	1.3	△ 1.3	0.4	1.7	1.3	0.9		0.0

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

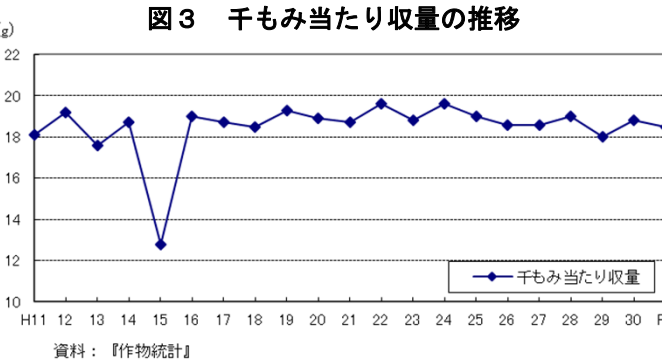
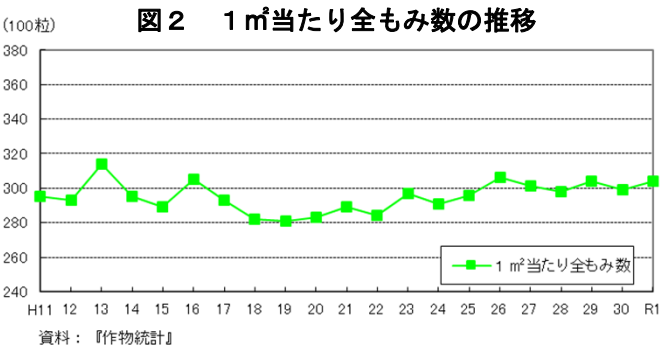


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
25	○	—	104
26	◎	×	105
27	○	×	103
28	○	—	105
29	○	×	99
30	○	—	101
R1	○	—	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（宮城は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

- 高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。
- ・ 高温登熟による品質低下への対策として晩期栽培（遅植え）の推進。
 - ・ 適正な水管理、土づくりの励行、適正な栽植密度・肥培管理等。
 - ・ 大規模化に対応した熟期の異なる品種構成の導入等の推進。

秋 田（前回変動:平成14年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は575kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「めんこいな」及び「ゆめおぼこ」が一定のウエイトを占めてきたことや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「めんこいな」及び「ゆめおぼこ」が平成22年より増加傾向となり、一定のウエイトを占めてきた。
（表1：両品種が増加傾向となった平成22年より表章）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H22	28	29	30	R1
あきたこまち	577	78.4	71.9	72.5	73.6	74.5
ひとめぼれ	575	9.2	8.1	7.9	7.7	7.7
めんこいな	634	5.9	8.0	8.2	7.7	7.3
ゆめおぼこ	617	1.7	3.6	3.4	3.3	2.9
						+1.4
						+1.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

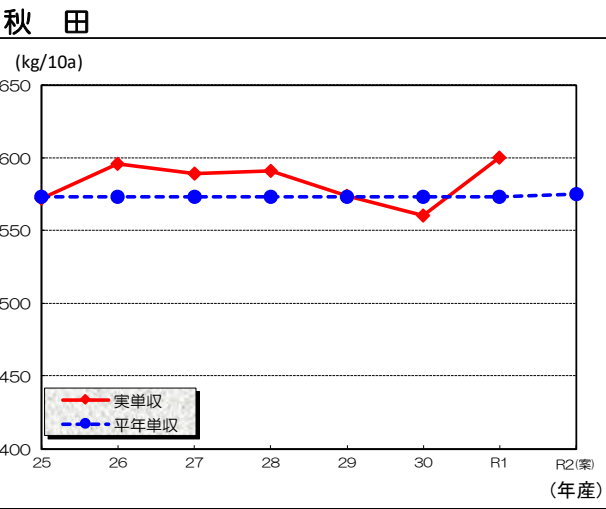
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H22	28	29	30	R1
県北	566	22.7	21.0	20.8	21.4	21.5
県中央	587	35.0	36.7	36.7	36.3	36.1
県南	590	42.3	42.3	42.5	42.3	42.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

秋田県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.3ポイント減少しているものの、千もみ当たり収量が1.6ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.3ポイント増加している。
（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



秋 田	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	572	596	589	591	574	560	600	
7中5平均	584 (11)							
平年単収	573	573	573	573	573	573	573	575
前年差	0	0	0	0	0	0	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	19.4	19.2	19.1	19.0	18.8	18.9	0.1	19.1	98.5	△ 1.5
1㎡当たり有効穂数（本）	433.8	473	428	427	403	451	48.0	434	100.1	0.1
1穂当たりもみ数（粒）	72.8	66.6	74.3	75.2	74.2	71.8	△ 2.4	73.4	100.8	0.8
1㎡当たり全もみ数（百粒）	315	315	318	321	299	324	25.0	314	99.7	△ 0.3
千もみ当たり収量（g）	18.5	19.1	19.0	18.3	19.1	18.9	△ 0.2	18.8	101.6	1.6
玄米千粒重（g）	21.4	21.9	21.8	22.3	21.8	21.5	△ 0.3	21.8	101.9	1.9
10a当たり玄米重（kg）	585	601	603	589	571	612	41.0	593	101.3	1.3
前40日平均気温（℃）	0.6	0.5	0.2	1.1	2.0	0.8	△ 1.3	0.8		0.2
後40日平均気温（℃）	0.7	△ 0.3	1.3	△ 0.9	△ 0.4	1.7	2.1	0.5		△ 0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移

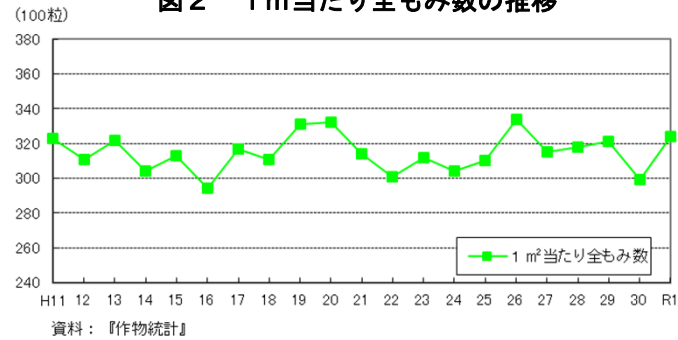


図3 千もみ当たり収量の推移

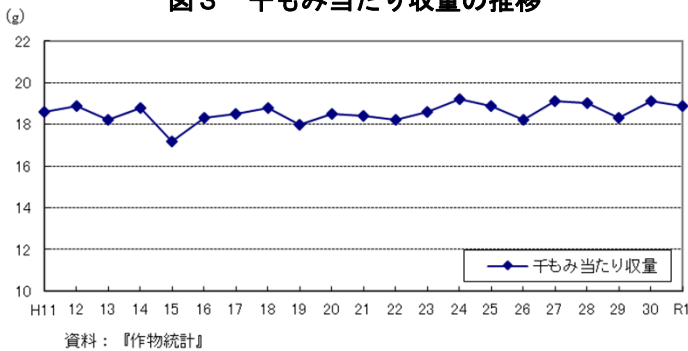


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終指 ）数
25	×	○	100
26	○	×	104
27	—	○	103
28	—	○	104
29	○	×	99
30	×	○	96
R1	○	—	104

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（秋田は1.85mm）以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 土づくりの推進、適期移植と栽植密度の適正化。
- ・ 適正な水管理、雑草防除の徹底。
- ・ 適正な施肥管理と適期刈取り等。

山 形（前回変動:平成30年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は598kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「雪若丸」が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「雪若丸」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。また、主力品種の「はえぬき」及び「つや姫」が安定した収量が見込まれる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
はえぬき	623	61.3	60.3	60.1	60.2	61.1
つや姫	605	11.5	13.3	14.4	14.4	14.6
ひとめぼれ	587	9.6	9.3	8.9	8.2	8.0
コシヒカリ	564	6.6	6.2	5.8	5.1	4.3
雪若丸	641			0.1	2.3	3.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

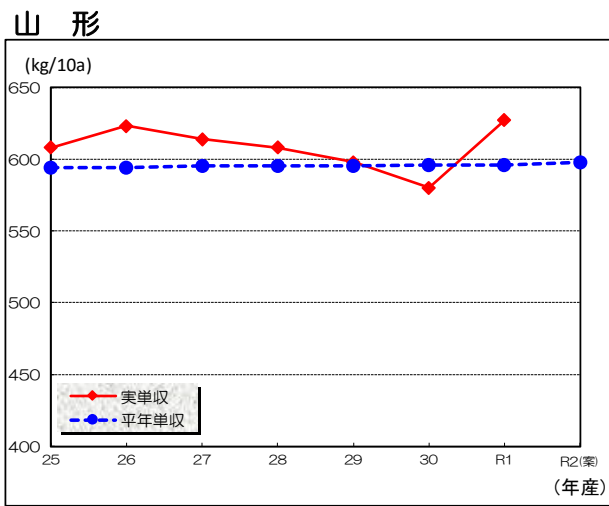
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
村山	628	22.8	22.8	22.8	22.8	22.8
最上	582	16.2	16.2	16.0	15.9	15.7
置賜	615	20.7	20.6	20.6	20.5	20.3
庄内	608	40.3	40.4	40.6	40.8	41.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

山形県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が1.3ポイント、千もみ当たり収量が0.5ポイント増加し、10a当たり玄米重は1.6ポイント増加している。
（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



山 形	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	608	623	614	608	598	580	627	
7中5平均	610 (14)							
平年単収	594	594	595	595	595	596	596	598
前年差	0	0	1	0	0	1	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	19.8	19.4	19.4	19.3	19.3	19.3	0.0	19.4	98.0	△2.0
1㎡当たり有効穂数(本)	472.5	524	470	473	464	520	56.0	481	101.8	1.8
1穂当たりもみ数(粒)	67.4	62.6	67.9	67.4	68.3	64.4	△3.9	67.3	99.9	△0.1
1㎡当たり全もみ数(百粒)	316	328	319	319	317	335	18.0	320	101.3	1.3
千もみ当たり収量(g)	19.2	19.1	19.5	19.2	18.7	19.1	0.4	19.3	100.5	0.5
玄米千粒重(g)	21.7	21.7	21.6	22.1	21.4	21.6	0.2	21.7	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	610	628	621	611	592	640	48.0	620	101.6	1.6
前40日平均気温(℃)	0.6	1.1	0.3	1.5	2.9	0.6	△2.2	1.0		0.4
後40日平均気温(℃)	0.9	△0.6	1.2	△0.9	△0.1	1.6	1.7	0.5		△0.4

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移

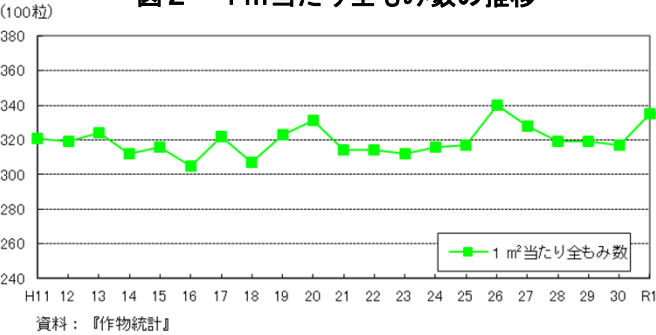


図3 千もみ当たり収量の推移

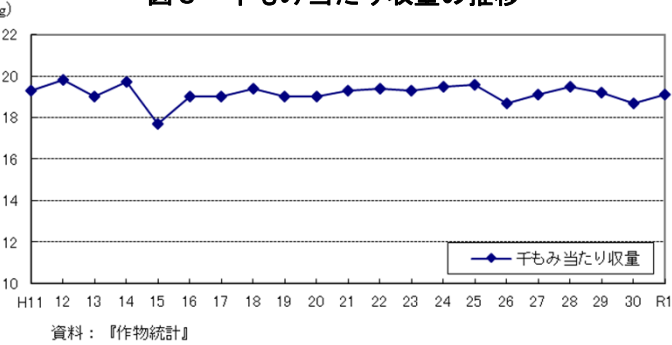


表4 最近の作柄(平成25年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
25	—	○	102
26	◎	×	105
27	○	—	103
28	○	—	103
29	○	—	100
30	—	×	96
R1	◎	—	105

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大きい
ものから数えて9割を占めるまでのふるい目
幅(山形は1.85mm)以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 土づくりの推進、健苗育成、適正な水管理・施肥の徹底。
- ・ 土壌診断に基づくリン酸、カリ等の適量施肥等。
- ・ つや姫は、登熟期の水管理と適期刈取の徹底。
- ・ 雪若丸は、初期生育の確保のため、適期移植の徹底と適正な栽植密度での植込の実施、速効性成分の多い肥料を使用。

福島（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は550kg（対前年差+5kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「天のつぶ」が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「天のつぶ」等が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	563	59.2	59.6	59.4	57.7	55.5
ひとめぼれ	588	22.5	22.2	21.4	20.4	20.3
天のつぶ	609	7.9	7.7	8.7	12.6	14.7
					+3.0/年	

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
中通り	538	55.9	55.8	55.5	55.0	54.4
浜通り	519	10.1	9.4	9.9	10.6	11.6
会津	601	34.0	34.8	34.6	34.4	34.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

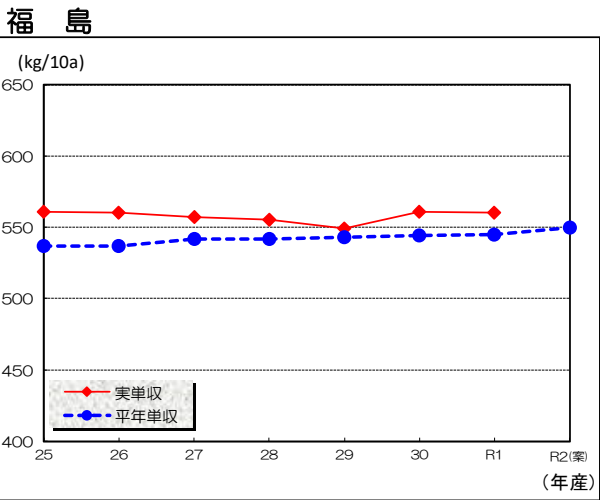
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

福島県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が0.5ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.9ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は2.2ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



福島	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	561	560	557	555	549	561	560	
7中5平均	559 (14)							
平年単収	537	537	542	542	543	544	545	550
前年差	0	0	5	0	1	1	1	5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.1	17.3	17.2	17.1	17.3	16.8	△ 0.5	17.4	96.1	△ 3.9
1㎡当たり有効穂数（本）	389.5	420	395	405	396	414	18.0	400	102.8	2.8
1穂当たりもみ数（粒）	75.6	73.6	75.9	75.8	77.8	75.4	△ 2.4	76.1	100.7	0.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	296	309	300	307	308	312	4.0	305	102.9	2.9
千もみ当たり収量（g）	18.8	18.4	18.9	18.3	18.6	18.6	0.0	18.7	99.5	△ 0.5
玄米千粒重（g）	21.9	22.2	21.7	21.9	21.7	21.8	0.1	21.9	100.0	0.0
10a当たり玄米重（kg）	556	568	567	561	572	579	7.0	569	102.2	2.2
前40日平均気温（℃）	0.6	1.4	0.5	1.5	3.2	0.6	△ 2.7	0.9		0.3
後40日平均気温（℃）	0.9	△ 1.1	1.0	△ 1.0	0.3	1.3	1.0	0.6		△ 0.3

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

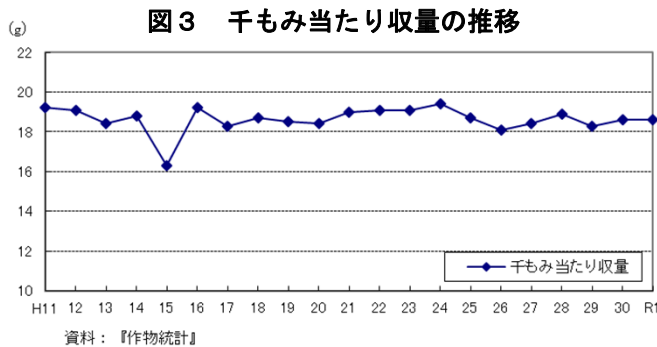
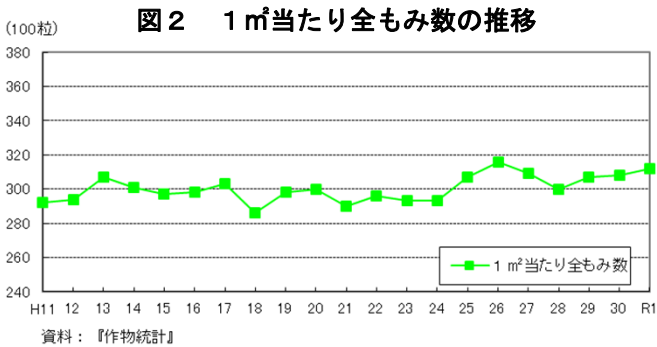


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
25	○	—	104
26	◎	×	104
27	○	×	101
28	—	○	102
29	○	×	100
30	○	—	101
R1	○	—	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（福島は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 品種の市場性、冷害危険度等を総合的に考慮した適地適作の推進。
- ・ 土壌診断に基づくカリ施用、堆肥の施用による土づくり、緩効性肥料使用時の適切な追肥等の指導。

埼 玉（前回変動:平成24年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和 2 年産水稻の10a当たり平年収量は492kg（対前年差+ 2 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「彩のきずな」が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「彩のきずな」が増加傾向にあり、令和 2 年産も同様の傾向になるものと考えられる（表 1：「彩のきずな」が増加傾向となった平成26年より表章）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	28	29	30	R1
コシヒカリ	486	39.5	38.5	37.0	34.8	33.4
キヌヒカリ	464	15.0	10.9	10.0	9.3	7.4
彩のかがやき	525	31.4	31.8	32.6	32.8	31.4
彩のきずな	514	3.5	9.9	11.4	13.5	17.6
彩のみのり	522	2.0	1.3	0.7	0.4	0.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H26	28	29	30	R1
東部	498	65.8	66.7	66.4	66.2	66.2
西部	470	34.2	33.3	33.6	33.8	33.8

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

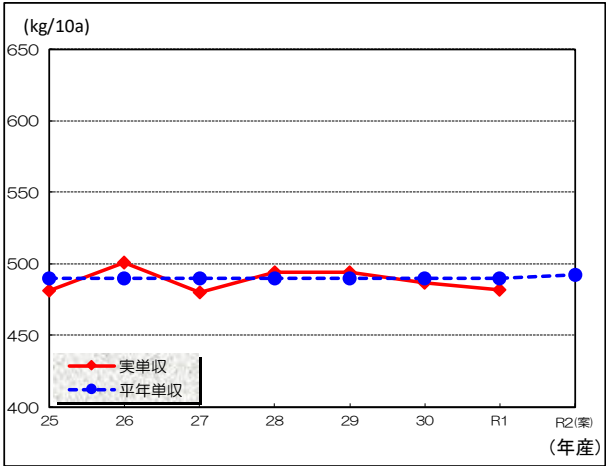
埼玉県における近年の10 a 当たり収量については、概ね平年並で推移している。（図 1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.7ポイント減少しているものの、1 m²当たり全もみ数が3.1ポイント増加している結果、10 a 当たり玄米重は0.3ポイント増加している。

（次ページ表 3、表 4、図 2 及び図 3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

埼 玉



埼 玉	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	481	501	480	494	494	487	482	
7中5平均	488 (-2)							
平年単収	490	490	490	490	490	490	490	492
前年差	0	0	0	0	0	0	0	2

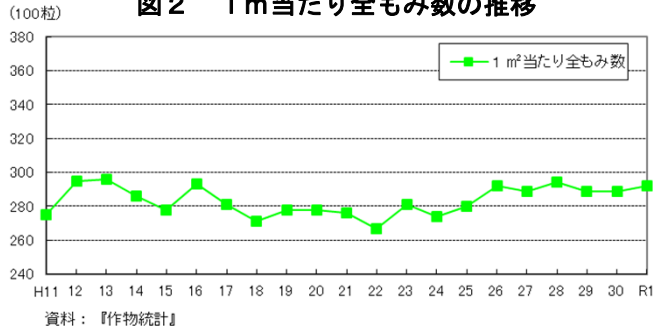
資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	17.3	16.6	16.5	16.4	16.2	15.9	△ 0.3	16.7	96.5	△ 3.5
1㎡当たり有効穂数（本）	360.2	374	362	384	389	368	△ 21.0	368	102.3	2.3
1穂当たりもみ数（粒）	76.8	77.3	81.2	75.3	74.3	79.3	5.0	77.3	100.7	0.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	277	289	294	289	289	292	3.0	286	103.1	3.1
千もみ当たり収量（g）	17.7	16.9	17.1	17.4	17.1	16.8	△ 0.3	17.4	98.3	△ 1.7
玄米千粒重（g）	20.8	20.4	20.7	21.0	20.6	20.0	△ 0.6	20.8	100.0	0.0
10a当たり玄米重（kg）	494	489	504	503	495	492	△ 3.0	496	100.3	0.3
前40日平均気温（℃）	1.0	2.1	1.1	2.3	4.2	0.8	△ 3.4	1.6		0.6
後40日平均気温（℃）	0.9	△ 0.9	0.9	△ 0.5	0.8	1.4	0.7	0.9		0.0

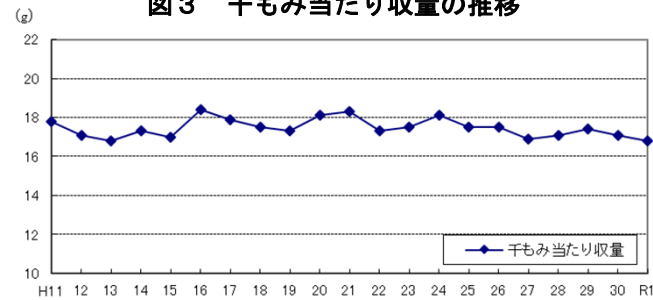
資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移



資料：『作物統計』

図3 千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終指 ）数
25	—	×	98
26	○	×	102
27	○	×	97
28	○	×	101
29	○	—	101
30	—	×	99
R1	—	×	98

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大
きいものから数えて9割を占めるまでのふるい
目幅（埼玉は1.80mm）以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

品質・食味向上及び安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 栽培基準や栽培指針に準じた肥培管理を基本とし、栽培管理技術や土づくり等を徹底。
- ・ 夏場の高温対策として、水管理の徹底、栄養診断に基づいた施肥の実施及び適期収穫の指導。

千葉県（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は544kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「ふさがね」が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「ふさがね」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		27	28	29	30	R1
コシヒカリ	526	66.1	66.4	67.3	65.8	64.3
ふさがね	599	14.0	14.0	17.3	18.1	19.8
ふさおとめ	563	11.0	10.8	12.1	12.8	12.7
あきたこまち	557	4.0	3.0	2.8	2.9	2.8

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		27	28	29	30	R1
京 葉	526	27.4	27.4	27.4	27.2	27.1
九十九里	563	51.6	51.9	52.0	52.1	52.3
南 房 総	527	21.0	20.7	20.6	20.7	20.6

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

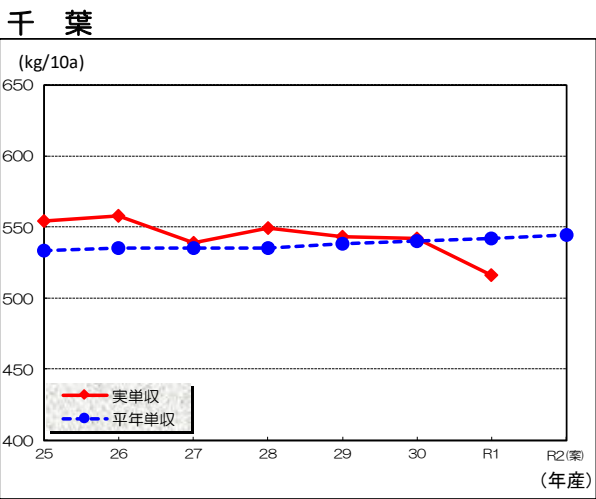
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

千葉県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が0.5ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.7ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.5ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



千葉県	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	554	558	539	549	543	542	516	
7中5平均	545 (3)							
平年単収	533	535	535	535	538	540	542	544
前年差	0	2	0	0	3	2	2	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.9	16.1	16.1	16.0	16.0	15.7	△ 0.3	16.2	95.9	△ 4.1
1㎡当たり有効穂数（本）	379.6	386	372	394	398	398	0.0	383	100.8	0.8
1穂当たりもみ数（粒）	78.2	79.0	82.5	77.7	80.2	77.4	△ 2.8	78.9	100.9	0.9
1㎡当たり全もみ数（百粒）	295	305	307	306	319	308	△ 11.0	303	102.7	2.7
千もみ当たり収量（g）	18.6	18.0	18.3	18.1	17.3	17.3	0.0	18.5	99.5	△ 0.5
玄米千粒重（g）	21.4	20.7	22.0	21.7	21.1	20.2	△ 0.9	21.3	99.5	△ 0.5
10a当たり玄米重（kg）	549	549	562	553	552	532	△ 20.0	557	101.5	1.5
前40日平均気温（℃）	0.9	0.3	1.0	1.5	1.9	△ 0.6	△ 2.5	1.0		0.1
後40日平均気温（℃）	0.6	0.8	0.3	0.2	1.5	1.7	0.2	0.8		0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

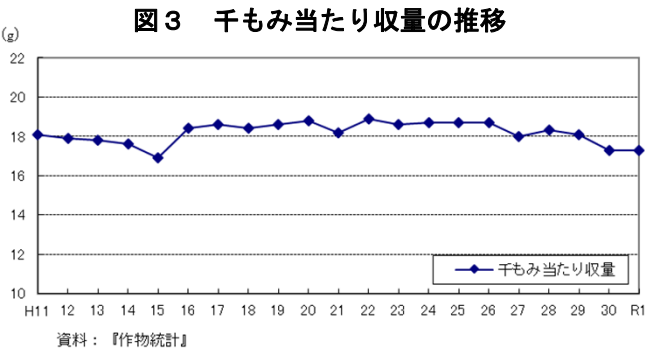
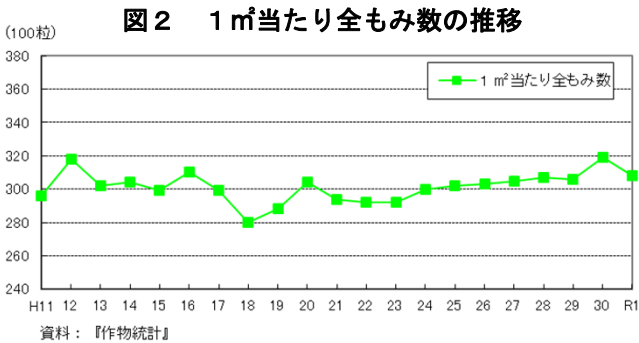


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
25	○	—	104
26	○	—	104
27	○	×	101
28	○	—	102
29	○	×	100
30	○	※	99
R1	—	×	95

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（千葉は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

近年、異常気象が続いている中、気象条件に強い稲作りに向け、以下の指導が行われている。

- ・ 植付早限の厳守、前半の生育確保、適正な追肥の施用等。
- ・ 適正な水管理、適正な防除。
- ・ 耐病性、耐倒伏性、品質向上のためのケイ酸の補給。

富 山（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は544kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「てんこもり」が増加傾向であることや、密植栽培（70株/3.3㎡）の定着による安定的な穂数確保により、1㎡当たり全もみ数が増加していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「てんこもり」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	544	76.7	75.3	74.3	72.1	69.1
てんたかく	590	10.7	10.0	9.7	10.4	10.4
てんこもり	605	4.8	5.6	5.7	6.4	6.6
					→ +0.5/年	
富富富	544				1.4	2.9

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

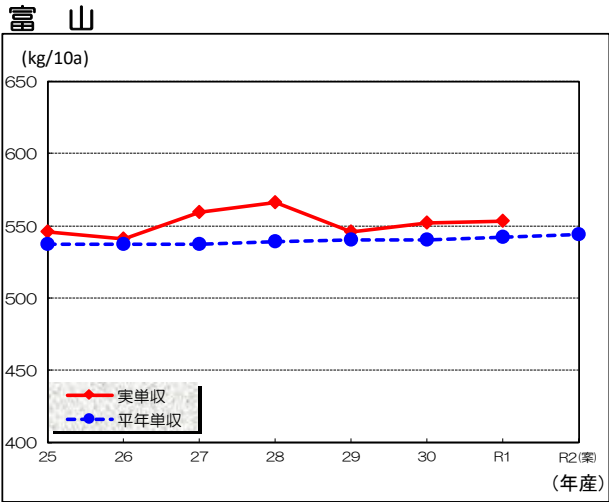
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

富山県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が0.5ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が1.0ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.5ポイント増加している。

（次ページ表2、表3、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



富 山	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	546	541	559	566	546	552	553	
7中5平均	551 (9)							
平年単収	537	537	537	539	540	540	542	544
前年差	0	0	0	2	1	0	2	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表2 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1 m ² 当 たり 株 数 (株)	18.7	19.1	19.2	19.1	19.2	18.9	△ 0.3	18.9	101.1	1.1
1 m ² 当 たり 有 効 穂 数 (本)	362.2	386	384	384	371	386	15.0	368	101.6	1.6
1 穂 当 たり も み 数 (粒)	77.2	75.9	77.1	74.2	77.4	75.9	△ 1.5	77.2	100.0	0.0
1 m ² 当 たり 全 も み 数 (百粒)	282	293	296	285	287	293	6.0	285	101.0	1.0
千 も み 当 たり 収 量 (g)	19.9	19.6	19.6	19.6	19.7	19.3	△ 0.4	19.8	99.5	△ 0.5
玄 米 千 粒 重 (g)	22.0	21.8	22.2	22.5	22.0	21.5	△ 0.5	22.1	100.5	0.5
10 a 当 たり 玄 米 重 (kg)	559	573	579	560	565	565	0.0	562	100.5	0.5
前 40 日 平 均 気 温 (℃)	0.7	0.4	0.7	1.3	2.8	0.3	△ 2.5	1.0		0.3
後 40 日 平 均 気 温 (℃)	0.6	△ 0.6	0.6	△ 0.4	0.7	1.3	0.6	0.3		△ 0.3

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

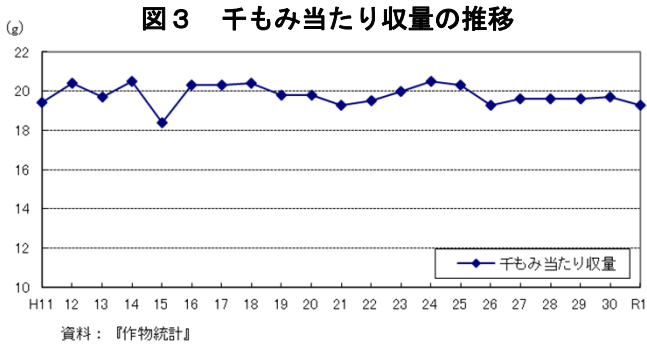
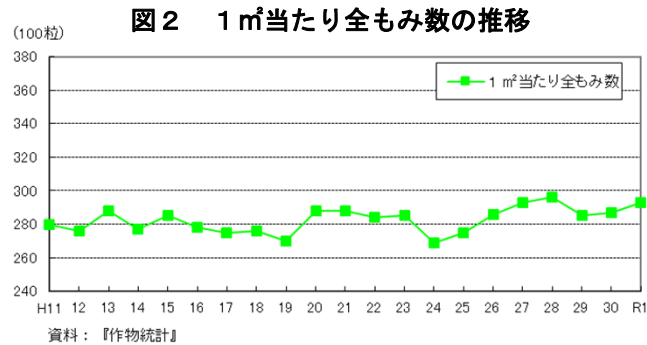


表3 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
25	—	○	102
26	○	×	101
27	○	—	103
28	◎	—	106
29	○	—	100
30	○	—	102
R1	○	×	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（富山は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

- 高温に打ち勝つ米づくりに向け、以下の指導が行われている。
- ・ 高温登熟の回避として適期移植の実施。
 - ・ 高温に打ち勝つ稲体づくりとして、適正穂数に向けた栽培密度（70株/3.3m²）の確保、適期・適切な中干しの徹底。
 - ・ 土壌診断に基づく土づくりの実施・基肥の適正な施用。

石 川（前回変動:平成29年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は523kg（対前年差+3kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「ひやくまん穀」が増加傾向であること等
によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準
の高い「ひやくまん穀」が増加傾向に
あり、令和2年産も同様の傾向になる
ものと考えられる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	516	72.3	68.8	69.3	64.4	60.8
ゆめみづほ	562	18.4	18.4	17.4	18.0	18.1
ほほほの穂	522	2.3	2.2	2.0	2.0	2.0
ひやくまん穀	600			1.1	2.5	4.2
						+3.1

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
加賀	545	56.8	57.7	57.7	57.9	58.2
能登	493	43.2	42.3	42.3	42.1	41.8

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

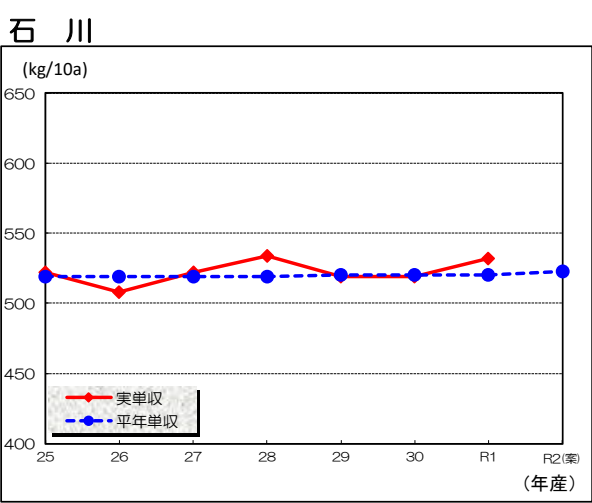
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

石川県における近年の10 a 当たり収
量については、平年収量を上回って推移
している。（図1）

収量構成要素については、平成16年か
ら26年の平均値と平成21年から令和元年
の平均値を比較すると、千もみ当たり
収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数
が0.5ポイント増加している結果、10 a
当たり玄米重は0.3ポイント増加してい
る。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



石 川	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	522	508	522	534	519	519	532	
7中5平均	523 (3)							
平年単収	519	519	519	519	520	520	520	523
前年差	0	0	0	0	1	0	0	3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.1	17.2	17.5	17.4	17.9	17.8	△ 0.1	17.6	97.2	△ 2.8
1㎡当たり有効穂数（本）	389.4	394	389	389	392	398	6.0	389	99.8	△ 0.2
1穂当たりもみ数（粒）	73.5	73.4	74.3	73.5	74.5	73.6	△ 0.9	74.0	100.7	0.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	287	289	289	286	292	293	1.0	289	100.5	0.5
千もみ当たり収量（g）	18.5	18.4	18.9	18.5	18.2	18.5	0.3	18.5	100.0	0.0
玄米千粒重（g）	21.9	21.5	22.3	22.2	21.9	21.7	△ 0.2	21.9	100.0	0.0
10a当たり玄米重（kg）	532	532	545	529	530	542	12.0	534	100.3	0.3
前40日平均気温（℃）	0.6	0.3	0.6	1.3	2.4	0.3	△ 2.1	0.9		0.3
後40日平均気温（℃）	0.5	△ 0.5	0.7	△ 0.2	1.1	1.1	0.1	0.3		△ 0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移

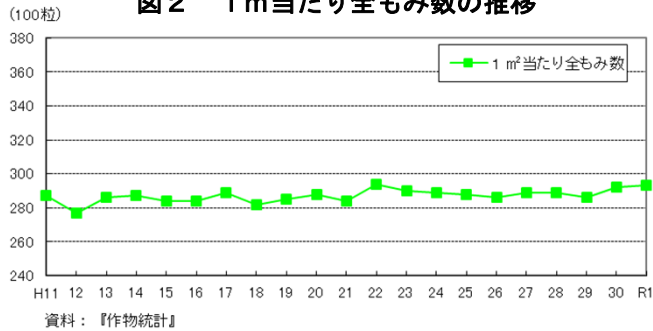


図3 千もみ当たり収量の推移

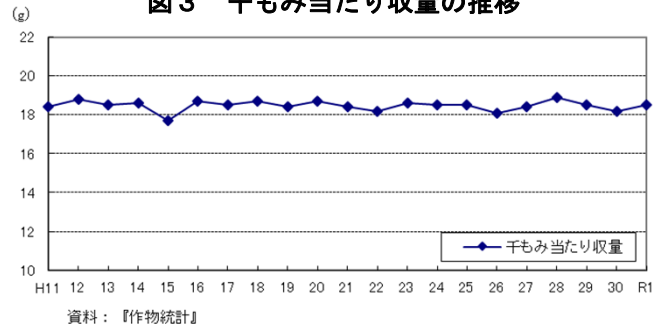


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
25	—	—	101
26	—	×	98
27	—	—	101
28	—	○	104
29	—	—	99
30	—	—	100
R1	○	—	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（石川は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 適正穂数（栽培密度）の確保
- ・ 肥料の適期・適量施肥
- ・ 適期収穫
- ・ 土づくり等の推進

岐 阜（前回変動:平成17年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は486kg（対前年差－2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「ひとめぼれ」及び「あきたこまち」が減少傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、売れる米づくりと高品質安定生産の面から、「ハツシモ」、「コシヒカリ」は一定の作付が維持される一方、収量水準の高い「ひとめぼれ」及び「あきたこまち」が減少傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H18	28	29	30	R1
ハツシモ	459	36.4	35.7	36.5	42.4	38.0
コシヒカリ	499	29.9	31.8	31.5	30.3	32.8
ひとめぼれ	508	8.9	8.6	7.5	6.2	6.7
あきたこまち	502	8.2	6.8	6.3	4.9	4.7
						-5.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

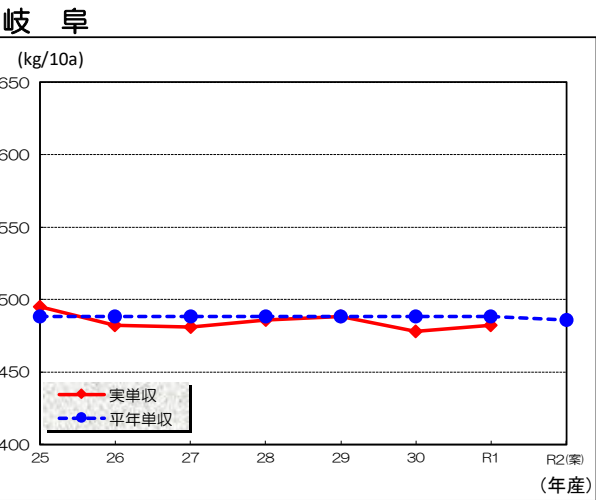
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H18	28	29	30	R1
西南濃	467	55.1	53.9	53.6	54.6	54.7
中濃	489	18.4	19.2	19.3	19.1	18.7
東濃	513	14.5	14.6	14.6	14.2	14.3
飛騨	522	11.9	12.3	12.5	12.1	12.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

岐阜県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数が1.3ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.9ポイント増加している。
（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



岐 阜	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	495	482	481	486	488	478	482	
7中5平均	484 (-4)							
平年単収	488	488	488	488	488	488	488	486
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.7	16.1	16.1	15.9	15.7	15.7	0.0	16.3	97.6	△ 2.4
1㎡当たり有効穂数（本）	349.1	361	354	364	356	353	△ 3.0	358	102.6	2.6
1穂当たりもみ数（粒）	75.2	73.1	75.1	73.6	75.0	75.4	0.4	74.4	98.9	△ 1.1
1㎡当たり全もみ数（百粒）	263	264	266	268	267	266	△ 1.0	267	101.3	1.3
千もみ当たり収量（g）	18.6	18.6	18.6	18.6	18.3	18.5	0.2	18.6	100.0	0.0
玄米千粒重（g）	22.7	22.8	22.8	22.8	22.5	22.4	△ 0.1	22.8	100.4	0.4
10a当たり玄米重（kg）	490	490	496	498	488	491	3.0	494	100.9	0.9
前40日平均気温（℃）	0.7	1.3	0.4	0.8	2.7	1.3	△ 1.5	0.8		0.1
後40日平均気温（℃）	0.5	△ 1.0	1.0	△ 0.6	0.1	1.2	1.2	0.1		△ 0.4

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

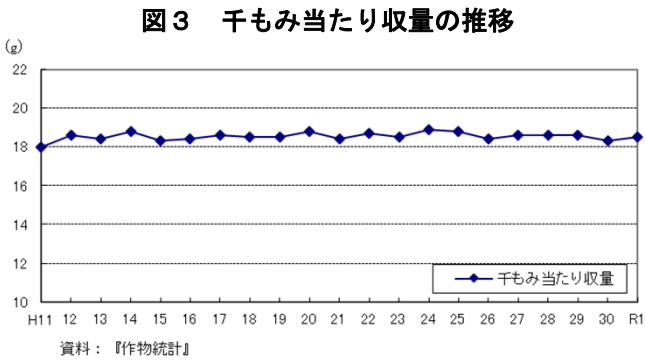
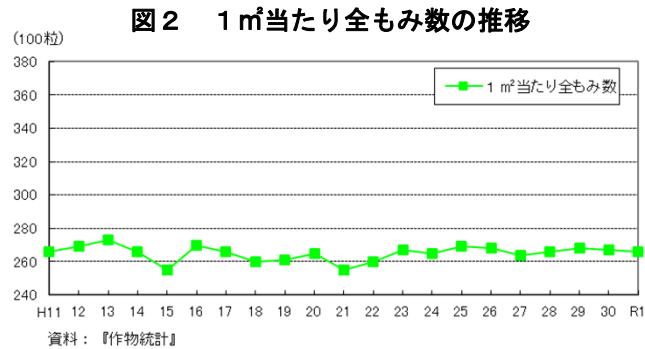


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
25	—	—	101
26	—	×	99
27	—	—	99
28	—	—	100
29	—	—	100
30	—	×	97
R1	—	—	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（岐阜は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

温暖化傾向に対応するため、以下の指導が行われている。

- ・ 疎植栽培の普及。
- ・ 緩効性肥料の導入。
- ・ 適正な肥培管理。
- ・ 適期収穫。

静岡県（前回変動：平成21年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は520kg（対前年差－1kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別等の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「きぬむすめ」が増加傾向にあるものの、同様の割合で収量水準が高い「あいちのかおり」が減少傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	503	44.7	43.0	43.6	44.7	45.0
あいちのかおり	539	16.8	15.3	15.0	13.6	13.4
きぬむすめ	544	9.4	12.6	13.6	14.3	14.3
キヌヒカリ	514	9.7	9.8	8.5	7.8	7.8
にこまる	540	5.1	5.7	6.1	6.2	6.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
東 部	510	47.9	48.1	48.2	47.7	47.5
西 部	519	52.1	51.9	51.8	52.3	52.5

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

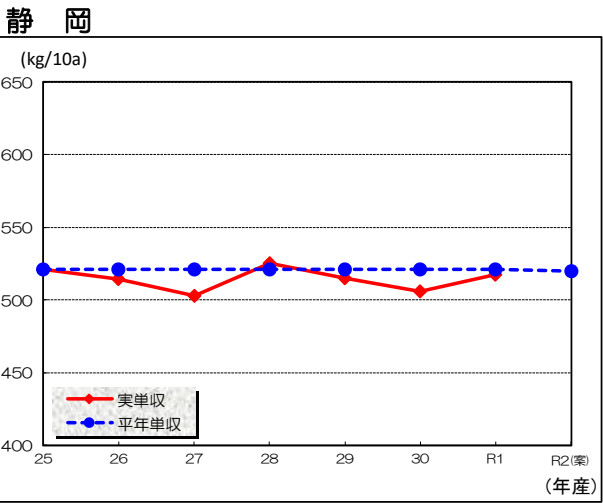
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

静岡県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数が0.5ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.9ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



静岡県	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	521	514	503	525	515	506	517	
7中5平均	515 (-6)							
平年単収	521	521	521	521	521	521	521	520
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.4	17.7	17.6	17.4	17.2	16.9	△ 0.3	17.7	96.2	△ 3.8
1㎡当たり有効穂数（本）	367.7	369	364	387	358	367	9.0	371	101.0	1.0
1穂当たりもみ数（粒）	75.5	75.1	76.4	73.9	77.7	82.0	4.3	75.0	99.3	△ 0.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	277	277	278	286	278	301	23.0	278	100.5	0.5
千もみ当たり収量（g）	18.9	18.6	19.4	18.5	18.6	17.6	△ 1.0	18.9	100.0	0.0
玄米千粒重（g）	22.2	22.0	22.1	22.3	22.0	21.2	△ 0.8	22.1	99.5	△ 0.5
10a当たり玄米重（kg）	524	516	538	529	518	530	12.0	529	100.9	0.9
前40日平均気温（℃）	0.5	0.4	0.1	1.2	2.4	0.0	△ 2.3	0.6		0.1
後40日平均気温（℃）	0.6	△ 0.5	0.8	0.3	0.7	1.5	0.8	0.6		0.0

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

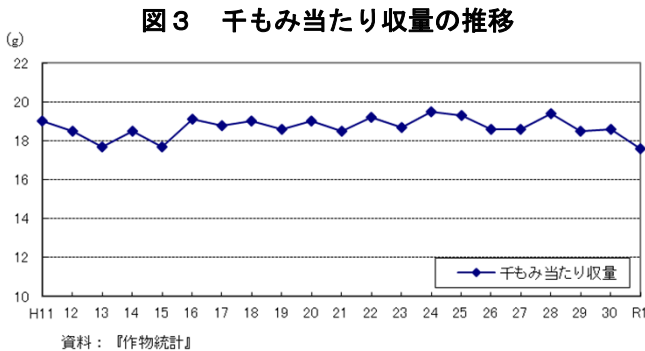
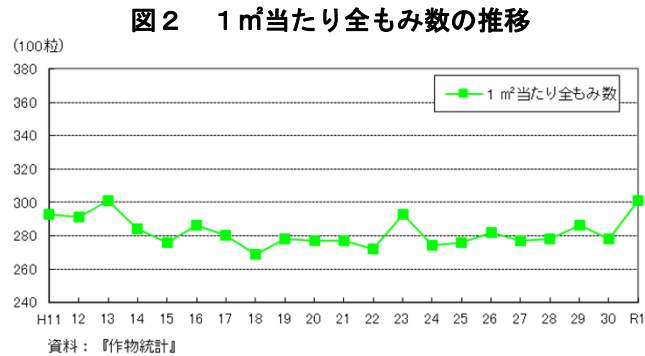


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終 指 数）
25	—	○	100
26	—	×	99
27	—	×	96
28	—	○	101
29	○	×	99
30	—	×	97
R1	◎	※	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大き
いものから数えて9割を占めるまでのふるい目
幅（静岡は1.80mm）以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

- 売れる米づくり及び省力・低コストのため、以下の指導が行われている。
- ・ 健苗育成、追肥（穂肥）の適量・適期の徹底。
 - ・ 適期防除・適期刈取り。
 - ・ 基肥一発肥料（側条施肥）導入や疎植栽培の拡大による育苗箱数削減。

広島（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は528kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「あきさかり」が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「あきさかり」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	509	44.3	44.5	43.8	44.2	43.5
あきさかり	593	4.6	5.1	6.2	9.3	11.4
					↗ +2.1/年	
ヒノヒカリ	512	19.9	18.5	14.5	12.5	12.2
あきろまん	544	9.6	8.7	8.1	7.9	7.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)				
		H27	28	29	30	R1
南部	520	41.5	41.2	40.7	40.5	39.8
北部	517	58.5	58.8	59.3	59.5	60.2

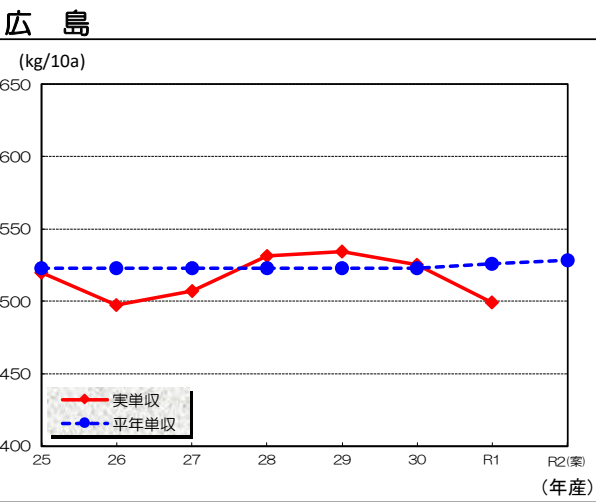
資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

広島県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数に増減はなく、千もみ当たり収量が1.1ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は0.3ポイント減少している。
（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



広島	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	520	497	507	531	534	525	499	
7中5平均	516 (-10)							
平年単収	523	523	523	523	523	523	526	528
前年差	0	0	0	0	0	0	3	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.7	15.7	16.0	15.9	15.5	15.4	△ 0.1	16.0	95.8	△ 4.2
1㎡当たり有効穂数（本）	370	372	342	381	353	379	26.0	366	98.8	△ 1.2
1穂当たりもみ数（粒）	77.8	75.5	83.3	74.5	79.9	75.2	△ 4.7	78.3	100.6	0.6
1㎡当たり全もみ数（百粒）	286	281	285	284	282	285	3.0	287	100.0	0.0
千もみ当たり収量（g）	18.9	18.5	19.2	19.2	19.3	17.9	△ 1.4	18.7	98.9	△ 1.1
玄米千粒重（g）	21.8	21.8	21.9	22.5	22.0	21.4	△ 0.6	21.9	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	538	521	547	546	545	511	△ 34.0	536	99.7	△ 0.3
前40日平均気温（℃）	0.5	△ 0.0	0.7	1.3	2.0	0.1	△ 1.8	0.6		0.1
後40日平均気温（℃）	0.8	△ 1.7	0.7	△ 0.0	0.6	1.0	0.5	0.2		△ 0.6

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移

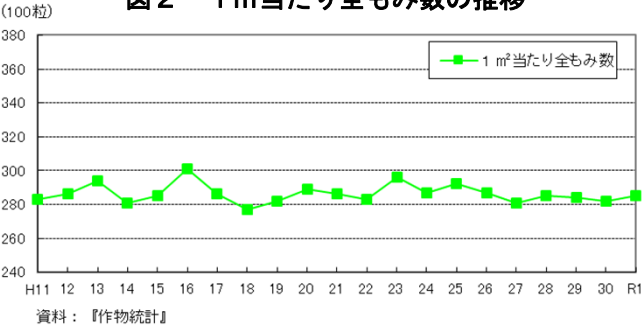


図3 千もみ当たり収量の推移

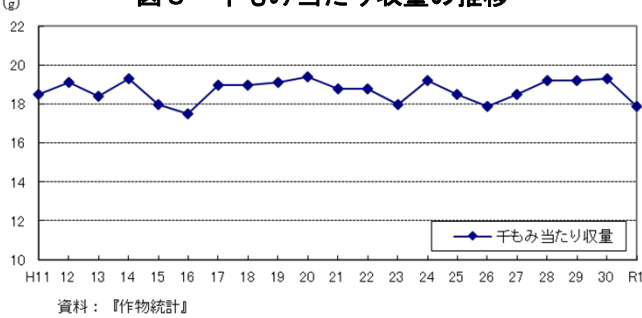


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終指 ）数
25	○	×	99
26	—	×	95
27	×	—	96
28	—	○	102
29	—	○	102
30	×	○	101
R1	—	※	95

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大きい
ものから数えて9割を占めるまでのふるい目
幅（広島は1.80mm）以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

- 需要に応じた生産に向け、以下の指導を行っている。
- ・ 良好な管理が行われているほ場の作付の維持・拡大。
 - ・ 低コスト化技術（密播疎植栽培、直播栽培等省力栽培）の導入。
 - ・ コシヒカリと比較して収量性の高い（多収で品質の良い）品種を導入して経営改善。

高 知（前回変動:平成28年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は456kg（対前年差－2kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等
によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別等の動向

品種構成の動向をみると、収量水準
の高い「よさ恋美人」が増加傾向にあ
るものの、「南国そだち」は減少傾向
にあり、令和2年産も同様の傾向にな
るものと考えられる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	471	51.5	51.2	51.6	51.5	52.8
ヒノヒカリ	421	29.1	29.1	29.4	29.2	28.1
にこまる	445	4.1	4.5	4.9	5.5	5.5
よさ恋美人	514				0.5	1.4
南国そだち	481	1.1	0.9	0.9	0.7	0.6

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
中東部	467	58.9	60.0	60.0	60.0	59.7
西部	418	41.1	40.0	40.0	40.0	40.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

なお、特に県西部において高齢化等
により生産組織へ委託する農家が増加
傾向にあり、受託面積割合が高くなっ
ている。

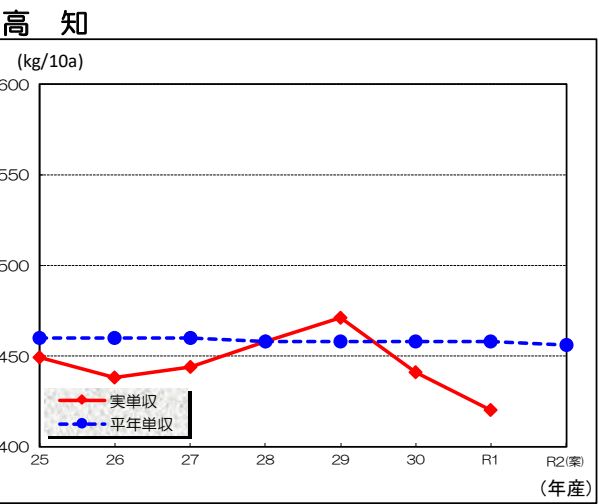
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

高知県における近年の10 a 当たり収量
については、平年収量下回って推移して
いる。（図1）

収量構成要素については、平成16年か
ら26年の平均値と平成21年から令和元年
の平均値を比較すると、千もみ当たり
収量が1.1ポイント増加しているものの、
1㎡当たり全もみ数が3.2ポイント減少
している結果、10 a 当たり玄米重は1.8
ポイント減少している。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



注：グラフの目盛りの最高収量を600kgとしている。

高 知	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	449	438	444	458	471	441	420	
7中5平均	446 (-12)							
平年単収	460	460	460	458	458	458	458	456
前年差	0	0	0	-2	0	0	0	-2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

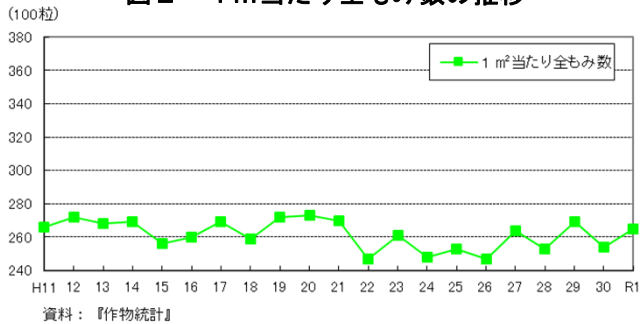
	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	15.4	14.7	14.5	14.5	14.5	14.5	0.0	14.7	95.5	△ 4.5
1㎡当たり有効穂数（本）	371.7	351	343	381	348	360	12.0	351	94.5	△ 5.5
1穂当たりもみ数（粒）	70.4	75.2	73.8	70.6	73.0	73.6	0.6	72.3	102.7	2.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	263	264	253	269	254	265	11.0	255	96.8	△ 3.2
千もみ当たり収量（g）	18.1	17.5	18.7	17.9	17.9	16.2	△ 1.7	18.3	101.1	1.1
玄米千粒重（g）	21.3	21.1	21.5	21.0	21.2	20.8	△ 0.4	21.2	99.5	△ 0.5
10a当たり玄米重（kg）	472	461	474	481	454	430	△ 24.0	464	98.2	△ 1.8
前40日平均気温（℃）	0.3	△ 0.1	0.7	0.5	0.7	0.2	△ 0.5	0.3		0.0
後40日平均気温（℃）	0.5	△ 0.6	0.7	0.7	0.7	0.0	△ 0.6	0.3		△ 0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

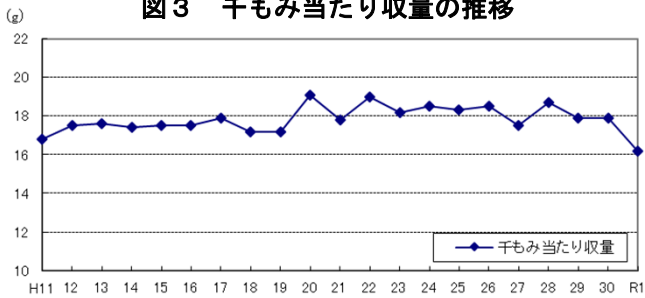
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移



資料：『作物統計』

図3 千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数		登熟		（作況最終指数）
	早期	普通	早期	普通	
25	※	○	○	※	98
26	×	※	○	×	95
27	—	◎	×	※	96
28	×	×	○	○	100
29	◎	—	×	—	103
30	×	×	×	×	96
R1	◎	×	※	※	91

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目割の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（高知は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

品質向上に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 適正な肥培管理、水管理、適期防除、適期刈取。
- ・ 高温障害対策として、早期栽培では収穫前の水管理の徹底、普通期栽培では適期移植（移植時期を遅らせる）。

大 分（前回変動:平成28年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和 2 年産水稻の10a当たり平年収量は499kg（対前年差－ 3 kg）となった。
これは、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別等の動向

品種構成の動向をみると、品種構成に大きな変化はみられない。（表 1）
なお、ヒノヒカリは、登熟中の高温による品質低下が他の品種に比べ著しいが、消費者の人気の高いこと等から、大きく変動する状況ではないとの情報がある。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
ヒノヒカリ	499	74.7	74.6	75.7	73.9	73.9
ひとめぼれ	493	11.0	10.8	11.0	11.0	11.0
コシヒカリ	494	3.7	3.6	3.7	3.8	3.8
にこまる	521	4.2	3.5	2.9	3.4	3.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

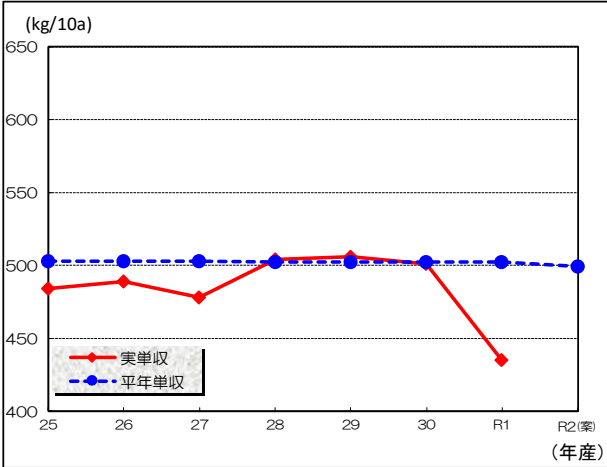
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
北部	507	28.9	29.1	29.3	29.1	29.2
湾岸	488	29.2	29.1	28.9	29.2	29.3
南部	484	29.4	29.3	29.4	29.2	29.0
日田	475	12.5	12.5	12.4	12.5	12.5

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

大分県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図 1）
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1 m²当たり全もみ数が0.1ポイント増加しているものの、千もみ当たり収量が2.3ポイント減少している結果、10 a 当たり玄米重は1.5ポイント減少している。
（次ページ表 3、表 4、図 2 及び図 3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準
大 分



大 分	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	484	489	478	504	506	501	435	
7中5平均	491 (-11)							
平年単収	503	503	503	502	502	502	502	499
前年差	0	0	0	-1	0	0	0	-3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.2	15.5	15.3	15.2	14.8	15.0	0.2	15.6	96.3	△ 3.7
1㎡当たり有効穂数（本）	357.3	348	367	368	376	335	△ 41.0	359	100.6	0.6
1穂当たりもみ数（粒）	80.9	82.5	80.4	81.5	80.9	83.3	2.4	81.0	100.1	0.1
1㎡当たり全もみ数（百粒）	291	287	295	300	304	279	△ 25.0	292	100.1	0.1
千もみ当たり収量（g）	17.5	16.9	17.4	17.3	16.7	16.0	△ 0.7	17.1	97.7	△ 2.3
玄米千粒重（g）	21.2	21.4	20.9	21.4	21.0	20.4	△ 0.6	21.2	100.0	0.0
10a当たり玄米重（kg）	509	486	514	519	509	447	△ 62.0	502	98.5	△ 1.5
前40日平均気温（℃）	0.5	0.0	1.1	1.2	1.3	0.2	△ 1.1	0.6		0.1
後40日平均気温（℃）	0.5	△ 1.3	1.0	△ 0.2	0.3	1.5	1.2	0.0		△ 0.5

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移

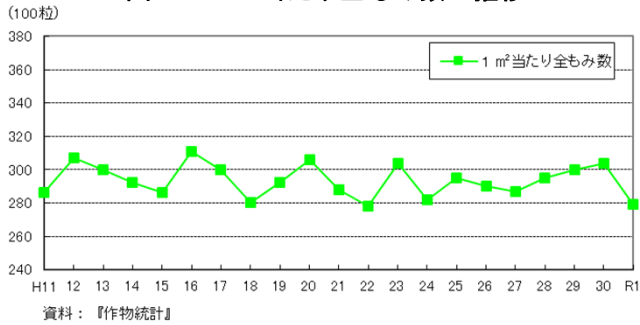


図3 千もみ当たり収量の推移

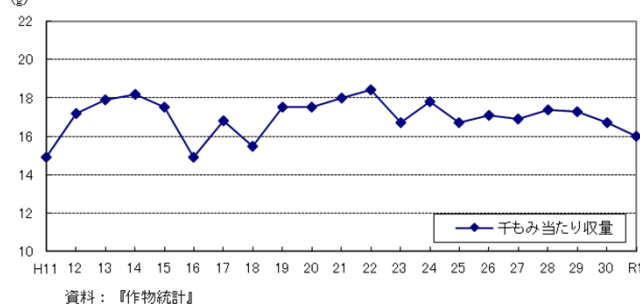


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
25	—	※	96
26	—	×	97
27	×	×	95
28	—	—	100
29	○	×	101
30	○	×	100
R1	※	※	85

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（大分は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

高品質、良食味米生産を基本とし、効率的な生産体制の整備による低コスト生産を推進するため、以下の指導が行われている。

- ・ 担い手への農地集積。
- ・ 乾田直播等の新技術や多収品種の導入による生産コスト削減。
- ・ 夏期高温によりヒノヒカリの品質低下が問題となっている地域における移植時期の適正化等。

鹿 児 島（前回変動:平成28年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は484kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「なつほのか」及び「あきほなみ」が増加傾向であること等によるものと考えられる。

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
ヒノヒカリ	485	64.0	64.2	64.5	62.5	61.4
コシヒカリ	447	16.7	16.2	16.0	15.4	14.4
あきほなみ	514	6.6	6.9	7.3	7.4	7.6
なつほのか	514					2.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「なつほのか」及び「あきほなみ」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。
(表1)

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。(表2)

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

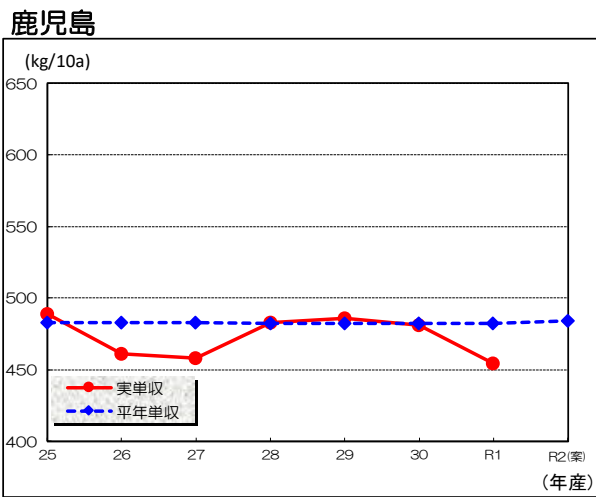
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
高収量地域	495	53.1	53.3	53.4	52.4	54.3
中収量地域	461	42.5	42.6	42.5	43.4	41.6
低収量地域	414	4.4	4.1	4.1	4.2	4.1

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。
3 高収量地域：出水薩摩地帯・伊佐始良地帯、中収量地域：薩摩半島地帯・大隅半島地帯、低収量地域：熊本大島地帯

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

鹿児島県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。(図1)
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.1ポイント増加しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.6ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は2.3ポイント減少している。
(次ページ表3、表4、図2及び図3)

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



鹿児島	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	489	461	458	483	486	481	454	
7中5平均	474 (-8)							
平年単収	483	483	483	482	482	482	482	484
前年差	0	0	0	-1	0	0	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.0	17.5	17.4	17.5	17.6	17.4	△ 0.2	17.7	98.3	△ 1.7
1㎡当たり有効穂数（本）	395.6	351	382	395	380	355	△ 25.0	382	96.5	△ 3.5
1穂当たりもみ数（粒）	71.7	75.8	75.1	72.4	72.6	74.4	1.8	73.2	102.1	2.1
1㎡当たり全もみ数（百粒）	285	266	287	286	276	264	△ 12.0	278	97.4	△ 2.6
千もみ当たり収量（g）	17.4	17.8	17.3	17.5	17.9	17.6	△ 0.3	17.6	101.1	1.1
玄米千粒重（g）	21.3	21.6	21.0	21.2	21.4	21.1	△ 0.3	21.4	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	500	474	496	500	493	465	△ 28.0	489	97.7	△ 2.3
前40日平均気温（℃）	0.3	△ 0.3	0.8	0.7	0.7	0.3	△ 0.4	0.2		△ 0.1
後40日平均気温（℃）	0.4	△ 1.1	1.0	0.4	0.3	1.1	0.8	0.1		△ 0.3

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

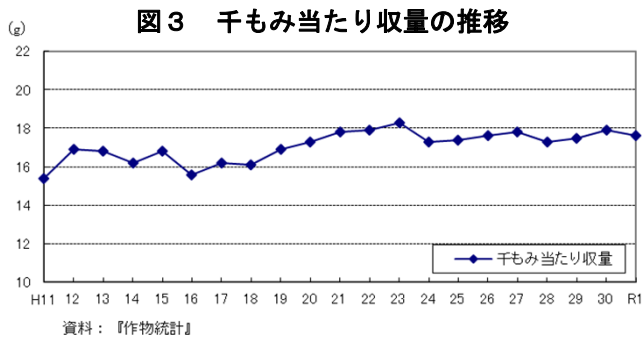
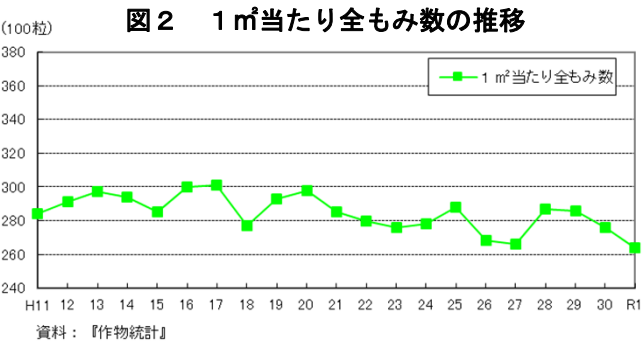


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数		登熟		（作最 況終指 ）数
	早期	普通	早期	普通	
25	×	—	◎	—	101
26	—	※	○	○	95
27	※	×	※	○	95
28	—	○	×	×	100
29	◎	—	○	×	100
30	○	×	—	—	100
R1	—	※	×	—	94

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大き
いものから数えて9割を占めるまでのふるい目
幅（鹿児島は1.80mm）以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

- （参考）栽培技術等の動向
- 良品質米の生産に向け、以下の指導が行われている。
- 健全な土づくり。
 - 適期植付・防除・収穫。
 - 適正な栽植密度・施肥・水管理。